

オールズ夫人の思い出

更井良夫

チャールス バアネル オールズ (Dr. Charles Bunnell Olds) 氏はアメリカン ボード (American Board Commissioners for Foreign Missions) の宣教師で岡山市には戦前約二十年駐在し、県下の伝道を助け乍ら、神戸女学院の理事長を長く勤め、同志社の理事もつとめていまして数年



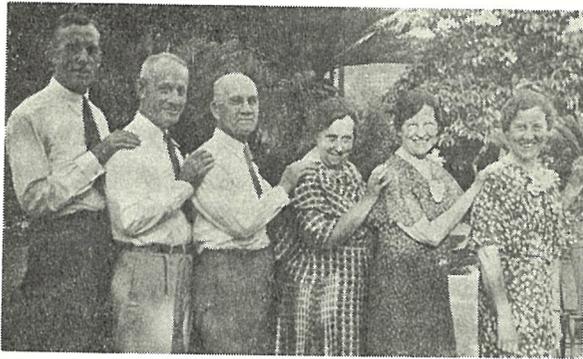
C. B. オールズ夫妻

前カリフォルニアのクレアモントで九十九歳で昇天されました。その夫人はゼネビー オールズで同志社創立の時新島先生を助け たゼローム デイヴィス (Jerome Davis) の娘で京都で生まれました。昭和十四年四月二十一日岡山市で脳溢血で急逝され、そのお墓は若王寺の同志社墓地の新島先生の背後にあります。私は岡山一中時代に岡山教会に属して、その期間この御夫妻には御指導頂きました。さて、この夫人はどうしたことか性教育に非常な関心と使命を感じ、米国から沢山参考書や十六ミリの映写機やフィルムを購入し、日本全国のキリスト教婦人矯風会やミッション関係の学校、組合キリスト教会を巡回して講演と映画の会をして、性教育の理論と實際を指導されていきました。

日本キリスト教婦人矯風会からは「新しい性教育」を出版し、警醒社（現在の教文館）からは「正しい性教育」を刊行し、行く先き先きで頒布していました。

時は既に満州事変勃発後で、大東亜戦争に突入前でした。政府は国民に命令して、戦力増強のために「産めよ 殖やせよ」と人口政策を強調していた時期で、人的資源の保護育成が、国家の最高方針の一つでしたのに、子供を沢山産むな、正しい産児制限をと、夫人は宣伝していたのです。だから憲兵や、警察の特高は毎日宣教師館に来ていましたし、夫人の他市に出掛ける時には、その行く先き先きに連絡して、チェックしていたのです。

だから夫人が急逝した時、オールズ氏は私に「ゼネビー死す」と当時エル大学教授だった弟のゼローム・デイヴィス (Jerome Davis) に打電させましたが、暫くして、この文句では、米国では殺されたと憶測する心配があるのだから、Apoplexy (脳溢血) と第二電報を打つよう依頼されました。それ程、夫人の性教育の働きもさること乍ら、米国では対日感情が悪化していたようでし



オールズ夫妻を訪ねて来たディヴィス家の二夫妻

た。
さて、このオールズ夫人が、昭和七年頃と記憶していますが、私が大学文学部神学科三課程の時、私に手紙をくれまして「同志社で新しい性教育の講演会を是非開きたいから、世話して下さい」と申し込まれました。今日と異り、当時は性教育なんて、

容易に口にしない、タブーの時世でしたので、少々困りましたが、同志社教会の堀貞一教師が、夫人はディヴィスの娘で、その幼少の時はよく知っているし、アメリカンボードの宣教師だから無茶な講演はしないだろうと賛成されたので、チャペル使用の許可をとって、広告ビラを貼り出したら、講演日の前々日、ミス・デントンから「一寸来てくれ」との伝言があり、デントン・ハウスに参上したら大変な剣幕で「同志社に性教育は不要です。講演会は中止しなさい。ミセス・オールズを断りなさい」

とのこと、開催日は迫っているし、ピラは学園内に貼ったし、進退合まって、夫人に、「デントン反対し、開催出来ぬ」と打電したら、「すぐ行く、オールズ」の返電あり、当時京都と岡山間は汽車で五時間余りかかりましたが、夫人は飛んで来ました。

「先日、神戸女学院で講演と映画会を開催したが、問題なしだったのに何故同志社で開催出来ないのか。すぐミス・デントンに逢って話をするから一緒に来て下さい」

ほとほと困りました。然しゆきがかかり上、ついに行きましたが、案の定、出逢いがしから陰悪な空気で、双方主張は譲らない。その論争の一部はまだ記憶しているが、「私はディヴィスの娘です。父の創立した同志社で、何故講演出来ないのですか」

「他のミッション関係の学校や、全国の組合教会や婦人会で招かれて講演しているのに、何故同志社で許されぬとは理解出来ぬ」

「同志社の教育方針に反しない講演で若い学生男女に、必要にして有益な話をするから賛成して欲しい」

然し、ミス・デントンは

「同志社に性教育は必要でない。性教育は宣教師の仕事でない。やめなさい」

「もし、強いて講演するなら、女子学生は出席させない」

約二十分程の激論だったが、双方平行線で、結局、文字通り喧嘩別れ、婦人宣教師でもこんな大きな声で争うのか、而もオールズ夫人は終りに泣き出す始末。私は往生しました。私の始めての経験でしたし、それから今日迄宣教師の喧嘩は見たことはあ

りません。

会場のチャペルは本部の指示で使用不許可で、新たに神学館（現クラーク記念館）で開催したが聴衆は男子学生のみで約三十余名、女子学生は一人も来ない。教師も来ない。講演は案外きわどい、危険なものでなく、倫理的なもので、男女の差とか、男女の交際とか、礼儀とかで無事終了しましたが、講演の始めに、ミス・デントンを酷しく批判したことは未だ記憶しています。堀牧師も講演謝礼と旅費とは、何んとか都合つけてやると私に約束したのに、講演会には姿を現はさず、ミセス・オールズは同志社の歓迎せず、失礼にも協力しなかった態度に失望して、不満足のまま岡山に帰られた。

私は学生時代、数多くの集会や講習会その他を企画し、主催し、実行したが、こんな惨めな、不成功な集会は他になかった。未だにあと味の悪さを噛みしめています。

（社会福祉法人 岡山博愛会理事長 更井良夫 昭八卒）

『同志社百年史』について

「通史編（全二巻）」

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育（明治前半期）

第二部 キリスト教教育の受難（明治後半期）

第三部 大学への道（大正期）

第四部 戦時下の学府（昭和前半期）

第五部 再生と発展（昭和後半期）

上野直藏総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粋的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起させるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起す点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」（全二巻）

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇円 送料不要の場合 五四〇〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

頒価・一二〇〇〇円送料不用の場合 一〇八〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
（☎〇七五―二五一―三三三八）

演劇その夢と現実

生きるとはただ夢を見ることでしかない、生きていく人間は、目の覚めるまで、生きていくという夢を見ているのだ。——この世では、それとは知らず、人みなが思い思いの夢を見ている。

カルデロン

近藤 公一

想像力の問題——夢と現実

若い時から演劇を考へつづけて三十年、いろいろ実行したり、書いたりしてきたが、今ふとカルデロンのこんな言葉がよみがえって来るのは、今日の時代のせいであろうか、或は私自身の年齢のせいであろうか。戦中戦後に育った私の目には現在の世の中がとてつもなくバロツコ的に思えてならないし、およそ十年毎に感傷的なロマンチシズ

ムや、観念的な理想主義、そしてやっと弁証法的なりアリズムに達した私だが、五代の半ば近く、最近若い頃からの友人を次々なくしたり、自分自身の心身の危機に直面したりしてまたセンチメンタルになっていくのかも知れない。

前の終戦直後、世のなかには何もなかった。とに角、何か食いものをみつつけて生きることが現実であった時代に、どういうわ

けか私は——いや、私たちはシラーや、クライストに熱中し、本で読むだけでは足りず、何とか舞台の上に実現しようとして夢中になっていた。「それとは知らず、みなが思い思いの夢を見てい」たのだろう。——総合芸術といわれる演劇の営みは当然のことながら一人では出来ぬ。夢の実現にはさまざまな芸術的、技術的力量が必要だし、お金も要る。何よりも一定の人々が一定の時間と場所に集って長期にわたる創造的な稽古を共にせねばならず、上演に際しては多くの観客の参加がなければならない。そのさまざまな困難を乗り越え、多数の人々の心と力とを結ぐもの、それは思想であり、つまり夢である。昔、私は夢という言葉はあまり使いたくなかった。むしろ関心はより多く私たち自身の現実にあった。よりよい生活、よりよい人生、よりよい社会が私たちの関心事であり、単なる閑つぶしの娯楽だけではなく、演劇の営為を通じて芝居をつくる側も、みる側もそれを通じて何かを考え、発見し、何かを学ぶことに面白みを感じていたのであった。プレヒトの存在を知ってから特に私はそう考えるようになった

た。だが、結局見果てぬ二つの夢が私には残っている。夢と現実を結ぐ想像力の問題かなとも思うのである。

地域の演劇——公共劇場の夢

若い独身時代の運動は、文字通り若さ、夢と情熱だけで十分だった。だが、結婚し、子供が出来、要するに生活と運動を両立させようとすることはほとんど不可能に近い。多くの劇団が出来ては姿を消してゆく。才能もあり、情熱もあるのにどんなに多くの人々が消えて行ったか。そのうちいわゆる商業演劇に生活の資を求めて行った友人たちも何人かいるが、その仕事は芸術や思想とはおよそ遠いものとなってしまった。私は頑なに地域の非職業演劇の道を追求しつづけ、京都にあるいくつかの劇団と計って協議会をつくり、府や市当局の支援も得て合同公演その他の実現にも努力してきた。京都会館や、文化芸術会館も実現し活況を呈しているが、肝心の劇団の方がつづかない。学校や病院の建物は建ったが先生やお医者さんはいないということがあるだろうか。——私はドイツ演劇を勉強して

いるので、ドイツ型の公共演劇のあり方が夢である。ドイツの芸術劇場はすべて州立又は市町村立で立派な建物だけではなく、各々の自治体の規模に応じ大なり小なり俳優をはじめ様々の芸術家、技術者その他のアンサンブルを抱えている。歴史的、風土的背景の違いと云ってしまえばそれ迄だが、これはドイツだけの話ではなく、ヨーロッパの各国がそうだし、アメリカでさえ、二十年ほど前から演劇の地方分権化が進んでいるという。最近来日したミルウォーキーのレパートリーシアターのように非常に優れた仕事をつづけている。

大学と演劇——同志社大学演劇学科の夢
これは又、夢のなかの夢であるがお許しを頂きたい。イプセンの本邦初訳が印刷されたのも同志社の雑誌であったし、劇団エランビタールの先駆的な運動もこれを推進したのは同志社の人々であった。同志社学生演劇の伝統は長く、優れた演劇学者も多数おられる。学としての演劇学は歴史的にまだ日も浅く、早稲田をはじめ東京に二、三を数えるのみであるが、演劇学会でも、

関西でつくるなら先ず同志社でね、という声をよくきく。もう十年前になるが、コペンハーゲンでの国際演劇学会に出席した時、ある分科会は各国大学に於ける演劇学科の報告会であった。私はその時の資料を大事に抱えて帰ったが、我が身の非力を顧みて大変恥かしい。大学に一学科をつくるなどということは勿論一人で出来ることではないが、それこそ教育の理念をはじめ具体的カリキュラムやスタッフ、それこそで学んだ人々の仕事のことなど一人であれこれ考えていると大変楽しくなる……と同時に大変なことだぞ、という気にもなる。

仕事と生活の他に、一人でプロデュサーや演出家を兼ね、時には俳優も兼ねるような無茶なことはもう出来ない、京都演劇教室というものをつくって来るべき日のためにいまだにしくく夢を追っているのだが、自分で出来もしないことに相変らず心を奪われているのが、つまり「目の覚めるまで、生きているという夢を見ている」となのだろうか。

(大学経済学部教授)